POOLE GAKUIN REPORT

プール學院報

愛と奉仕
140th
POOLE GAKUIN
FOUNDED 1879

第88号
2019年2月・3月
発行

学校法人 プール学院
〒544-0033
大阪市生野区勝山北1-19-31
TEL.06-6741-7005
FAX.06-6731-2431



1898（明治31）年のプール学院



CONTENTS

理事長・学院長挨拶 …… 1

[短期大学]
秘書科の取り組み …… 2
幼児教育保育学科の取り組み …… 3

[中学校・高等学校]
校長挨拶 …… 4
教職員メッセージ …… 5
生徒メッセージ …… 6
卒業生紹介 …… 6
クラブ等の成果 …… 7
主な行事 …… 7

キリスト教のメッセージ&コラム …… 8

同窓会だより …… 9
特集 …… 10
法人だより …… 12
編集後記 …… 12

ご挨拶

創立140周年を迎えるプール学院

理事長・学院長　杉山 修一

2019年6月、私たちの学院は創立140周年を迎える。神の歴史から言えば一瞬の時であるが、人間の時間感覚で言えば実に長い歴史を歩んできた。1879年メアリー・オクスラドによって始められた小さな永生女学校が、学院の名前になっているプール主教の尽力によって新しい校舎が与えられ、カサリン・トリストラムを校長に迎えキリスト教に基づく女子教育機関として成長することになる。

2018年11月、外国人居留地研究会の全国大会が築地にある聖路加国際大学で開催された。テーマは「居留地と女子教育」、東京女子大学の小檜山ルイ教授による基調講演に続いて各居留地の代表がそれぞれの居留地の女子教育機関を選んで研究報告とシンポジウムが行われた。私は大阪川口居留地を代表して川口居留地で始められた女子教育機関であるプール学院の居留地時代の生活について発表した。各居留地の力強い研究報告に比して貧しいものではあったが、プール学院の草創期から居留地から移転するまでの明治期のプール学院の生活を当時の写真を通じて報告した。この研究報告会の中で改めて確認したことは、基調講演で小檜山先生が語られた宣教師たちがロールモデルとして指し示した豊かなホーム（家庭・共同体）を作り上げる担い手としての女子教育があったこと、また卒業生の多くが伝道師や牧師夫人になるといった結果をもたらすほどのキリスト教教育への情熱が学校生活の中心にあったということであった。プール学院にあってもこのキリスト教教育への情熱こそがすべての学校生活を支える中心であったことがわかった。学院創立以来今日までの140年の時の流れの中に、一体どれほどこのキリスト教教育への情熱を持ち続けてきたのかを改めて振り返えらざるを得なかった。学校としてそれぞれの時代の要請に応えて優れた教育を目指すことは当然のことなのであるが、中心がぼやけていく中で社会に適応することで生き延びようとするキリスト教学校の存在理由を改めて問い直す機会になった。（10, 11頁に関連記事）

短期大学

秘書科の取り組みについて

秘書科では、早くからアクティブ・ラーニングをカリキュラムに導入し、就職を視野に入れた学びを実践しています。今回は、主に1年次生を対象にしたアクティブ・ラーニングについて、2名の学生の声、3名の教員による印象記をご紹介します。

長期インターンシップに参加して

秘書科1年次生　野榮 美穂・江﨑 緑

私たち2人は、夏休みの2か月間、株式会社ホテルグランヴィア大阪様での長期インターンシップに参加させていただきました。インターンシップ期間中は、午前7時半から午後4時半まで主に接客の業務をしておりました。先輩方と仕事をしていくなかで、お客様への細やかな気遣いや、より丁寧なおもてなしの心を学ぶことができました。また、挨拶やコミュニケーションの大切さも肌で感じることができました。



実習先の様子①
野榮 美穂さん



実習先の様子② 江﨑 緑さん

今回の経験は、これから就職活動を行っていくにあたり、とても貴重なものになったと感じています。今回、教えていただいた挨拶の大切さやおもてなしの心を大切に、社会に貢献できる人間に成長できればと思います。

海外研修（韓国）に参加して

秘書科教授　佐竹 純子

秘書科1年生3名が、2018年8月5日から18日まで、韓国語の短期研修（ソウル・聖公会大学校）に参加しました。私も3日間、視察させていただきました。


参加した3名の学生

立教大学など他大学の学生と共に約60名が入学式、クラス分けテストを経て、研修に入りました。K-POPにふれながらの親しみやすい少人数の授業で、伝統文化体験や、韓国の学生と多様なテーマで楽しく話し合いをする時間もありました。休日には地下鉄で明洞にも行ったそうです。前期に本学で韓国語の授業を履修していた3人は、ソウルの暑い2週間を満喫し、大きく成長しました。

聖公会大学校はキリスト教精神に基づき、社会に奉仕する教育を大切にしています。民主化運動の貴重な資料が展示されているのも拝見しました。お世話になった全ての方々に感謝するとともに、プール学院大学・プール学院大学短期大学部の時代から協定関係にある聖公会大学校で実施される来夏の短期研修に、最後の短大新入生から参加者が出ることを願っています。

基礎ゼミナール「テーブルマナー講習」

秘書科講師　谷口 浩二



食事のマナーの歴史は、古代エジプトにまで遡ります。古代エジプトの文献には、マナーの質とは何か、それは思いやりであると書かれています。人と人とが上手く付き合っていく為には、気遣いが大事であることが、この時代にすでに書かれていたことに驚くばかりです。このような時代から現代まで引き継がれているテーブルマナーはまさに先人達の知の結晶と言えるでしょう。

そこで興味深いのが、先人達が周りの人達を気遣い、熟考し、実践を経て後世に受け継いできた知の結晶であるテーブルマナーを現代の学生がどのように受け止めるのかであるが、後日提出された感想文からは、「反省」「行動」「希望」というワードが散見され、過去の自分を省みて、目の前のマナーをしっかりと習得し、将来に役立てていこうとする学生の強い思いを感じることができました。先人達の知恵が確かに現代の学生に引き継がれた瞬間でありました。


講習会の様子

キャリアゼミナール「卒業生との懇談会」

秘書科講師　加藤 晴美

2018年9月29日（土）に卒業生と在学生（1年次生）との懇談会を行いました。秘書科ではこの時期、毎年恒例の行事です。

2016・2017年度の卒業生12名が参加してくださり、有意義で楽しい時間を過ごしました。先輩方から現実味のある就職・進学活動の経験談や現在のご活躍ぶりを伺い、学生たちは就職・進学に向けて前向きな気持ちを高めることができたようです。また、率直な疑問に先輩方は優しく丁寧に答えてくださいましたので、将来に対する不安が少し和らいだのではないでしょうか。

卒業生の皆さんが立派な社会人として後輩たちを力づけてくださる姿が頼もしく、とても嬉しくなり私たちも大いに励まされました。卒業生の皆さんは、私たちの誇りです。


グループに分かれて卒業生と懇談

幼児教育保育学科の取り組みについて







「ぽてっこクラブ」開催



子どもたちは様々な環境に出会い、自分で出来ることを探して取り組もうとします。環境が、取り組みたいという子どもたちの気持ちを引き出します。例えば、自然の中で、多くのものに触れて遊ぶことは、子どもたちにとって、新しい世界との出会いです。環境に関わる事で、新しい学びがたくさんあります。幼児教育保育学科として、何を経験してほしいのか、どんなことに気付いてほしいのか、どんなことが子どもたちにとって学びになるのかを意図して、ねらいを持って考えながら、環境を構成する学びを展開しています。



そのようななか、毎年11月に2週間、保育環境を整え、子どもたち・保護者の方々とのコミュニケーションや子育て支援をねらいとして、「ぽてっこクラブ」を開催しています。本学1年次の学生が子どもたちと共に過ごし、保育者として主体的にスキルアップを図ります。この行事のすべてを学生が取り仕切り、受付や始めと終わりの挨拶、手遊びや紙芝居を子どもたちに披露し、楽しい時間を過ごします。また、それぞれの学生が個別に担当するご家族と一緒に、お芋掘り、バター作りにチャレンジし、くるくるうさぎ、ビュンビユン吹き流し、大きなシャボン玉などのおもちゃ作りなどを体験します。

今年も、子どもたちの笑顔と保護者の方々の笑い声で溢れる楽しい行事になりました。また、学生にとっても体験的な学びを得て、保育者として向上できる機会になったものと思われます。









プール学院
創立140周年に向けて

—平成30年間の歩み—

校長　内海 伸晃



30年続いた平成が終わろうとしている。この30年間、プール学院が歩んできた道を振り返って140周年を迎えたい。私がプール学院に着任したのは1980年（昭和55年）である。1年間非常勤講師を勤め、翌年1981年より専任教諭として採用された。職歴としては宗教部、教務部、同和教育推進委員会、学年主任、生徒指導部、と経験し、1993年教務部長、教学部長を経て、2005年より教頭、2012年副校長、2013年より校長に任命され現在に至っている。この間38年の経験を基に、私なりの所感を述べたい。

1 建学の精神である「キリスト教」教育

最も大切にされてきた学院の文化である。生徒・教職員が集まる時には必ず礼拝があった。毎日の礼拝、学校行事、自治会行事、職員会議…そこには、神様を賛美する聖歌、聖書、お祈りがあった。校舎改築の時、清心館・メアリーズホールを残したことは意味深い。阪神淡路大震災を経験してからはボランティア活動も盛んになった。東日本大震災以降は特に相馬市とのプロジェクトに生徒が積極的に参加している。

2 コース制と進学実績

コース制を持たないのがプール学院の伝統であった。1980年代はプール学院短期大学が就職も好調で、本校から優秀な生徒が数多く短期大学をめざしていた。しかしその後、4年生大学への進学希望者が多くなり、本校も国公立大学や関関同立への進学に力を入れるようになった。2002年中学でコース制（アドバンスコース・スタンダードコース）を導入した。プール学院中学校からの進学者が優秀で、国公立進学者は50名を超え、関関同立へも250名まで実績を伸ばした。その実績を基に数年は安定した入学者数を確保できた。新校舎建築も追い風になり、その当時在籍者数は1500名を超えた。ところがコース制による進学実績の維持は難しく、また少子化や女子校離れも影響し、受験者数が減少した。入学者の学力差も大きくなり、今までの体制では効果的な指導が困難になった。そこで、2012年度より中学校で一貫特進コースを設立し、国公立大学への現役合格を目指している。また、2017年にはキリスト教大学推薦コースを設立し、首都圏のキリスト教大学にも目を向け、指定校推薦での進路保障も充実させている。

3 生徒指導とクラブ活動

本校は「生活指導のしっかりした学校」で通っていた時代が長かった。特に身だしなみの指導は徹底されていた。制服のスカートの長さ、髪の毛、ソックス、補助カバン、どれも細かな規定があり、全教員で指導に多くの力を注いでいた。私が若いときには、進学指導より生徒指導を優先していると感じていた。厳しい罰則規定があり、びくびくしながら担任をしていた頃を思い出す。新校舎になり生徒が急増した時、その厳しい生活指導が通用しなくなった時期があった。その当時は学校全体に落ち着きが失われ、充実感も少なかったように思う。今振り返ると、生徒一人ひとりに寄り添う姿勢が私達教員に足りなかったと考えられる。学習面で日々の授業についていくのが難しい生徒も多く、その生徒を指導しきれなかった面があったと考えている。一教室に40名を超えると、本校ではやはり目が行き届かなかったのだろう。経営的には安定するが生徒達への愛情が足りなかった。

いっぽうクラブ活動においてはこの30年間、生徒のエネルギーは高く多くのクラブが成果を上げてきた。特に音楽系の吹奏楽、フォークソング、弦楽部、また、美術部、創作舞踊部など、部員数も増え急速に力をつけたように思われる。私が着任した頃のクラブ活動はどの部も趣味程度で、練習を毎日するクラブは少なかった。部員数は多くても、実際熱心に活動する生徒は限られていた。6時には下校、日曜日は活動しなかった。勉強を中心に学校生活を送ることに重点を置いていたように思われる。

4 グローバル化の推進と地域連携

平成の30年間大きな進展をしたのがグローバル化である。夏期休暇中のカナダ英語研修に始まり、イギリスのキャノンスレードとの姉妹校提携、韓国の崇徳女子高校との姉妹校提携、2016年度よりグローバルチャレンジプログラム（英国1ヶ月語学研修、ニュージーランド3ヶ月留学、カナダ1年留学）がスタートした。高校2年生の修学旅行も北海道からシンガポールに行き先を変更した。中学校においてもオーストラリア英語研修を実施している。宗教部主催でタイのボランティアスタディツアーも行われている。また、崇徳女子高校とは1ヶ月間の交換留学制度を設けている。海外からのお客様も多く、生徒達は海外の文化に接する機会を多く持つことが出来る。それによって実践的な語学力やグローバル感覚を身につけている。

また、海外だけでなく、地元生野区にも目を向け始めた。2013年には生野区との包括協定を結び、開かれたプール学院として地域の人達との関係を大切にしている。毎年、清心館でスプリングコンサートを実施し、地域の中学校と共に演奏し、好評を得ている。生野区主催の催しにも様々な形で参加している。また、近隣のパン屋さんとも協賛し、相馬市に献金を送り続けている。

5 これからのプール学院

女子校として行ってきた伝統は時代と共に形を変えながら、その時々で最も良い形を実現してきたのだと思う。後から反省することもあ

るが、先人達が築いてきた文化を大切にしなければならない。少子化が進み、女子校離れもあり厳しい時代ではあるが、まだまだ女子校として出来ることはたくさんある。苦しい時こそ原点に返り、オクスラドが教育を始めた時のことを思い、一人ひとりを大切にしたキリスト教の教えを中心に据え、前進すべきである。この思春期の大切な時期に他者に対する思いやりや、芸術に対する感性、集団での協調性、つまりは内面の豊かさを追求しなければならないと感じている。今後は生徒一人ひとりに寄り添い、多様な進路に対応できるカリキュラムや行事、コース制、人事配置を構築していかなければならないだろう。今も多くの卒業生達が輝く女性として社会で活躍しておられる。これからも卒業してから「プールで学んだことが良かった」と心から思える学院でありたい。

第38回近畿高等学校総合文化祭 徳島大会 美術・工芸部門に参加して

芸術科 教諭　内山 直樹

11月10日（土）に行われた美術・工芸部門の開会行事に参加するために早朝、大阪駅高速バスターミナルに、高校3年生玉岡那菜さんと保護者と待ち合わせをして6時40分発の大阪駅発の高速バスに乗った。9時30分にJR徳島駅に着き、徳島バスに乗り換え展示会場である文化の森に10時30分に到着した。その中にある徳島県立近代美術館と徳島県立21世紀館は、同じ建物の中で繋がっている複合文化施設であった。実は、10年前の近畿高等学校総合文化祭徳島大会も、本校生徒が出品しており、10年という歳月を思うのと同時に、徳島の地に縁を感じた。前回会場は、この施設ではなかった。そのころにはまだ、この施設はできていなかったようだ。

会場に到着して開会行事の前に、県立近代美術館の作品展示の見学を行った。流石に都道府県の代表ということもあり力作揃いであった。また、いつも思うのだが、地域によって作風が異なる。地域の題材を取り入れているところが少なからずあり、そこがこの展覧会の魅力となっている。大阪府からは、8名の出品。そのうち私学は玉岡さんを含む3人であった。公立と私学も含めて大阪の出品者は全員3年生であった。

玉岡さんは、第68回大阪私学美術展において100号の油彩作品「浮遊離脱」という作品で最高賞の大阪府知事賞に輝いた。そのことで、11月に行われる近畿高等学校総合文化祭に出品する権利を得た。実は、この大会参加の裏で、様々ないきさつや苦労があった。審査の結果、府知事賞が決まったことは、私自身もうれしい反面、正直戸惑いがあった。油彩出品で近畿総合文化祭に出品するのであるならば出品の規定のサイズが50号以内の為、それが決まるということは私学展が終わってから、短期間のうちに描き直さなければないことを意味する。本人に電話で府知事賞伝えると、府知事賞を取ったことについて喜んでいたが、近総文出品のことについては、「一晩考えます。」との返事であった。翌日、本人に確認すると「出品します。」という返事であった。玉岡さんは、夏休み中多忙な中も時間をみつけて8月までに目録写真用に仕上げてその後、10月までに加筆して何とか締め切りまでに仕上げることができた。また、出品作品の展示会場での再会は、私学展と異なり新鮮な印象があった。





今回の徳島大会では、近畿総合文化祭と徳島県高等学校総合文化祭の展覧会 略して県総文が同時開催をしていた。つまり、今回に限り近総文と同じ時期に開催時期を（本来はもう少し後の日程）ずらし一気に行うことができるようにしたそうだ。ゆとりある展示スペースで、大阪の私学展と違い、1段がけがほとんどで稀に2段がけがあるくらいでうらやましく思った。展示を見た後にその施設にあるレストランで昼食を取った後、受付を済ませイベントホールにて開会行事に参加した。最初は講演で徳島県立近代美術館上席学芸員の安達一樹さんによる「見ることについて」という演目で、導入部分にプロジェクターでロダンの考える人の写真を見せた後、「考える人と同じポーズをしてみてください。」という問いに会場では戸惑いながら再現していたが、再度もう一度考える人を見せて「実は、見ているというのは、実際はよく見ていないことが多い。」という話から学芸員ならではの視点で解説があった。また、今回の生徒の出品作品の中で、何作かをピックアップしたものを、プロジェクターで見せて解説をしていただいた。その後の交流会ではそれぞれの他府県の5人ほどで各班に分かれて、県立近代美術館常設展のコレクションの中を見学し、いくつかピックアップしたうちでどの作品が気に入ったのか用紙に記入していた。

最後に、近総文会場の自分の制作した作品の前に立ちプレゼンテーションを行った。作品の前に立つと、その作者と制作に対する姿勢がうかがい知れて面白かった。玉岡さん本人も、はにかみながら作品について解説していた。その後、常設展の出品高校生の人気ランキングを再度、安達一樹さんの解説付きでプロジェクターで投影して発表という形で会を締めくくった。高校生の人気ランキングは、写実的に描かれた作品よりもインパクトの強い作品が上位にきていたことが興味深かった。最後に会場を出るときは、徳島の高校生達が花道を作り、手を振って見送ってくれた。この後、会場からJR徳島駅までシャトルバスが出ており、それに乗車をした。バスの席の隣に京都府代表3年生の出品者と引率顧問の先生と会話をする機会があった。

ここでの出会いもそうであるが、今回の出品者と玉岡さん自身は、いずれどこかで出会うことがあると思うし、そのような意識の高い他府県の出品者との交流は、よい刺激として今後の糧になったことと思われる。この後、JR徳島駅で高速バスに乗り換えて帰路につき、お土産を買う時間もあまりなく、こうして日帰り近畿高等学校総合文化祭徳島大会強行ツアーを終えることとなった。

生徒メッセージ

小さな積み重ねから得たもの

高校Ⅲ年C組　大西 麻衣子

私はプール学院高等学校に入学した時に、二つ大きな目標を定めました。一つは、難関大学に進学すること、もう一つは大好きなフィギュアスケートでインターハイ、全国高校選手権に出場することでした。どちらも大変ハードルの高いものでした。難関大学に進学するには、高いレベルの成績が必要です。そのためには毎日の予習と復習が不可欠でした。小学生から始めたフィギュアスケートの練習は楽しいけれども、登校前の練習、学校が終わってからの夜遅くまでの練習のため勉強時間をとることが大変でした。そこで私は対策として学校の授業を大切にすること、神戸の練習場への往復の電車や練習の合間の休憩時間をうまく使えるように心がけました。主に限られた時間で小テストの単語を覚えたり、英検の対策に取り組みました。復習をする中でわからないところや不安なところがある場合は先生方に教えていただき、助けていただいたことも多々あります。



スケートの面では、高校生になって七時間目まで授業があるため、練習量は今までと比べて減りました。そのため少ない氷上練習で、どれだけジャンプの成功率を高められるか、スピンの完成度を高められるか、プログラムをミスなく完璧にこなせるかなど何度も考えました。私が試合で良い演技をするために今まで継続してやってきたことは、リンクの外での体力強化でした。筋トレやストレッチ、ランニングなど技術面のレベルアップのうえで基本となる部分を誰よりも強化するという意気込みで頑張ってきました。

私はこの三年間、いつも前向きな姿勢と高いものに挑戦する力を大切にしてきました。両立することは思いのほか大変でしたが、プール学院の素晴らしい教育環境の中で両方の目標を達成することが出来ました。大学進学後はスケートで培ったものを生かすため、2020年の東京オリンピックのボランティア活動を通して飛躍したいと考えています。



シリーズ 第28回 活躍する卒業生

子ども能力開花くらぶ Tulip friends 代表 田宮 由美さん（現在 川合）（第88回高校卒業生）



愛と奉仕の心を胸に、子どもの「心の自立」をサポート。

私は中学高校と、まさに青春時代をプール学院で過ごしました。厳しさの中にも温かさがある先生方のご指導や、愛と奉仕の学院理念のもとで、学び、考え、感じ、アクティブに行動し、充実した学生時代を過ごせたことは、社会に出てからも非常に役に立ち、今の私の活動の礎になっていると思っています。

卒業後、幼児教育を学び、小学校、幼稚園、保育士の資格を取得、そして結婚。一女一男の子どもを育てながら、教育の現場での仕事や子どもに関わるボランテイアを行ってきました。そのような中、子育ての不安や悩みの相談を多く受けるようになり、「心を育む」重要性をアドバイスするようになりました。話を聴かれた親御さん方に「もっと早く、そのことを知りたかった」と言われ、それらを広める為に2010年子ども能力開花くらぶを開設いたしました。



今の日本では、就きたい職業や進みたい道を考えた時、資格や学歴といった壁に当たります。学力が高いと将来の選択肢が増え、また世の中を理解する力も高まります。ですので勉強はとても大切です。ですが学力や勉強は「心の自立」のうえに成り立ち、伸びて行くのです。心は目には見えませんので、その成長は分かりにくいでしょう。ですが、草木が大地に根っこをはるように、心がしっかり育まれてこそ、子どもは将来、人生の大きな花を咲かせるのです。現在、息子は大学病院で医師として、娘は母子支援の職場でソーシャルワーカーとして働いています。二人とも塾へはほとんど行きませんでしたが、各々進みたい道を見つけ、自ら勉強していました。

「心が自立する子育て」に多くの方に共感やご支援をいただき、（株）KADOKAWA出版社より書籍を、新聞や雑誌、WEBサイトに子育て記事を執筆、また教育関係や保護者の方々に向けて講演という形で、発信させていただいております。

最後になりましたが、ご指導頂いた先生方のご健康とプール学院の今後益々のご清栄を祈念しまして、感謝の言葉とさせていただきたいと思います。

クラブ等の成果

中学放送部
- 第35回NHK杯全国中学校放送コンテスト6.15
  朗読部門 入選 全国大会出場　松下千華(3C)

高校陸上競技部
- 平成30年度大阪高校総体3・4地区予選会7.21
  5000m競歩 3位　東島風花(ⅡC)
- 第73回大阪高等学校総合体育大会8.12
  女子2年5000m競歩 5位　東島風花(ⅡC)

中学器械体操部
- 平成30年度大阪中学校体操競技選手権1部大会7.24
  女子個人総合 優勝　女子種目別跳馬 優勝　女子種目別ゆか 優勝
  女子種目別平均台 3位　生駒あずみ(2A)
- 平成30年度大阪市中学校秋季総合体育大会体操競技9.29
  女子団体総合 第3位
  種目別跳馬 第2位　生駒あずみ(2A)

中学ソフトボール部
- 第21回大阪私立中学校総合体育大会7.15　第3位
- 第33回近畿私立中学校女子ソフトボール選手権大会8.2
  1部第3位

中高美術部・高校芸術系特進生徒
- 第67回大阪私学美術展7.29
  大阪府知事賞　玉岡那菜(ⅢF)
  優秀賞　玉岡那菜(ⅢF)／鈴本美紀(ⅢA)／岩本莉穂(IF)
  奨励賞　玉岡那菜(ⅢF)／鈴本美紀(ⅢA)／鎌苅香穂(ⅢA)／
  吉本　夢(ⅢA)／賀門明日香(ⅡA)／村上琳胡(ⅡA)／
  尾白安里(ⅡB)／軽澤萌亜(ⅡD)／高篠彩香(IA)／
  川端紀穂(3C)／河田好緒(2C)
- 第38回近畿高等学校総合文化祭美術・工芸部門
  奨励賞　玉岡那菜(ⅢF)

中高吹奏楽部
- 第57回大阪府吹奏楽コンクール中地区大会8.4
  金賞 中地区代表
- 第57回大阪府吹奏楽コンクール8.11　金賞

中高いけばな同好会
- 第31回大阪地区学生いけばな競技会8.6
  佳作　高山彩愛(ⅡF)／奥野日菜(3C)／木村美菜子(3C)

高校創作舞踊部
- 全日本高校大学ダンスフェスティバル8.8　入選

高校フォークソング部
- We are Sneaker Ages 8.16　優秀校賞

高校放送部
- 第39回大阪府高等学校芸術文化祭放送文化部門11.4
  アナウンス部門 優秀賞 2019全国総合文化祭出場権　岡田羽叶(IF)
- 第38回近畿高等学校総合文化祭放送部門
  アナウンス部門 奨励賞　岡田羽叶(IF)

〈個人表彰〉

- 第58回大阪府高等学校英語暗唱・弁論大会10.14
  暗唱の部 第5位　伊藤稀美(IF)
- 第14回大阪私学中学校英語暗唱・弁論大会10.27
  暗唱の部 優勝　甲斐さくら(2A)
- 第2回樟蔭杯英語プレゼン大会11.18
  TOEIC賞　扇谷絵里子(ⅡC)
  ウェブリオ賞　上原萌子(ⅡC)
- 全国硬筆作品展覧会9.26
  大阪市長賞　竹谷梓(ⅢB)／小畑海愛(1A)
  大阪府教育委員会賞　吉良彩世(ⅢC)／羽山結奈(1A)
- 第11回あなたのおすすめの本のPOP広場
  OLA賞(大阪公共図書館協会賞)　羽山結奈(1A)

主な行事

7月

2～10日	期末考査(大雨休校のため2日順延)
11日～16日	高Ⅱ修学旅行(シンガポール・マレーシア)
11日～31日	高Ⅲ夏期講座
20日～8月14日	高校　英国1ヶ月語学研修
26日	中12特進GCリトリートキャンプ
27日	終業の日
28日～8月3日	タイ スタディーツアー

8月

5日～6日	広島平和礼拝
20日	高Ⅲ授業開始
20日～23日	中学一貫・高Ⅱ一貫選抜特進S文理勉強合宿
25日	始業の日 同窓生対象入試説明会
30～31日	実力考査

9月

22日	文化祭
25日	中高鑑賞の日 (シルク・ドゥ・ソレイユ キュリオス)

10月

11日～17日	中間考査
15日～17日	中3 British Hills 英語合宿
18日	中・高Ⅱ遠足
21日	中学入試プレテスト
26日～30日	韓国・崇徳女子中高訪問

11月

3日	高校入試オープンスクール
10日	中学入試説明会　高校入試芸術実技講習会
14日	中学合唱コンクール
17日	大阪府内女子中学生英語暗誦大会
21日	収穫感謝礼拝 中3卒業論文提出日
22日	アドヴェント礼拝　宗教講話
24日	高校入試説明会

12月

1日・8日	高校入試説明会　芸術実技講習会
3日～7日	期末考査
8日～27日	高Ⅲ冬期講座
15日・18日・21日・22日・26日	中高入試個別相談会
15日～23日	中学オーストラリア英語研修
14日	クリスマス礼拝
20日	終業の日 キャンドルライトサービス

中学校・高等学校

「J君の涙」

外国語科　久保 義道

ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。

（マタイによる福音書 26:75）

庶民の生活は貧しいながらも、東海道新幹線が開通し、東京オリンピックに日本中がわき上がり、何か新しい時代を予感させる頃のお話です。小学生だったJ君は学校にも慣れ、毎日楽しい日々を送っていました。お母さんは、お手製の蒸しパンに、教会の庭のイチジクで作ったジャムをぬりおやつに出してくれます。寒くなる冬に備えて、セーターや帽子も編んでくれます。お父さんは厳しかったですが、時々キャッチボールをしてくれて「上手くなったけど、まだまだ長嶋にはほど遠いな」と励ましてくれます。

それなのに何か不満があったのでしょう、ある日、友達と相談し家出を決行します。のび太やジャイアンが出てきそうな資材置き場に集合します。夕方になると、友達は、「財布忘れた」とか「犬に餌やってすぐ戻る」とか言って結局J君だけが残されます。お腹もすくし、寂しいし、暗い資材置き場で一人きり。「たこ焼きでも食べよ」と端から端まで1kmほどの商店街へ出かけます。通り過ぎる大人たちはみんなじろじろと見てくるような気がします。「誰も僕の気持なんか分かるわけない。」と自分に言い聞かせて歩きます。自転車に乗ったお巡りさんが近づいて「こんな遅い時間に一人で何してるの。」「お母さんに買い物を頼まれました。」とっさに嘘が口から出ました。「そうか、気を付けてね」とにっこり笑ってお巡りさんは去ります。「危なかった。捕まるところだった」そう思ってまた歩きます。とうとう、商店街の反対の端まで来ましたが、その先は暗闇。仕方なく来た道を戻ります。やはり、大人の視線を感じます。

そうやって歩いていると、突然、目の前にお母さんが現れました。心臓が止まるほど、ドキンとしました。「あーどうしよう。家に帰れと言われる。家に帰ったらまた、叱られる。」するとお母さんは、ものすごい顔でうっすら涙を浮かべ「帰りたくないなら、帰ってこなくてもいい」そう言い放って、J君に背を向けて人ごみの中に消えていきました。お母さんの後ろ姿が見えなくなるとJ君の頬を大粒の涙が流れ落ちました。

聖書のこの箇所を読むたびに、子供だけでなく、大人も含めて、私たち人間はなんと弱い存在であるか、そして、いつも私たちを神様は見守り、赦して下さると、感じいるのです。

短期大学

『終わりの後に始まりがあります』

チャプレン　ヒューム ユーワン



2月はまだ冬の季節でありますが、その短い期間を経て、冬は終わり、春の季節が始まります。日本では、春は重要な季節であり、沢山の人々にとって、春の期間は彼らの人生が変わるということです。特に、プール学院短期大学では3月中に卒業式が催されますので、卒業する学生たちの短期大学での生活は終了となりますが、その後、彼らの人生は新しい始まりの段階に入ります。そのような過程、つまり終わりの後に始まりがあることに対して、季節も重要な役割があり、季節の変化がその新しい始まりを強めるというわけです。春分の日は3月末頃に当たるので、人々にとって、4月の入社式や入学式は新鮮に感じることだと思います。私にとっては、4月に入社式や入学式が催されることは面白い習慣に感じます。イギリスでは、大学の卒業式は6月頃で、入社はその後に行い、入学式は10月頃行われます。私はイギリスの大学を卒業しましたので、そのような流れを経験したことがありますが、どの程度イギリスの大学を卒業する人々が新スタートを感じるか、恐らく日本の方々とは感じ方が違うと思います。結果として、イギリスには、人生における変化と季節（自然世界）の変化に対して、ズレがあると思います。けれども、教会においてはそのような大きなズレはありません。何故なら、世の光、つまりイエス様のご誕生があるからです。イエス様のご誕生は12月25日（クリスマス）に祝い、彼の誕生によって神様が人間の姿となり、全人類が救われるということです。確かに、12月25日は冬の最中ですが、古代ローマ暦によると、冬至点は12月25日に当たるので、イエス様は一番短い日、つまり日中の光が一番少ない日に生まれたと考えられます。ですから、その日以降に、日光は段々と多くなるため、イエス様は太陽、または光として度々描写されています。また、イエス様は次のように言われました「わたしは世の光である」（ヨハネによる福音書8:12）。クリスマスは既に終わりましたが、イエス様は「命の光」で、その光はまだ輝いているため、私たちが暗闇の中を歩くことは必要ではありません。



学院創立140周年を記念して



一般社団法人POOLE理事長
鈴木 光子（高73回・小柴）

同窓会は昨年9月に賀寿祝福礼拝の時をもち、140名弱の還暦・古希・喜寿・傘寿以上の同窓生が祝福を受けました。99歳、98歳の先輩も集ってくださり、うれしいひとときでした。来年の再会を約束して散会いたしました。

今年、プール学院は創立140年を迎えます。同窓会ではそのことを記念して7月13日（土）11時半より、中之島のリーガロイヤルホテルにて同窓会主催のお祝いの会「大同窓会」を開くことに致しました。杉山修一理事長にメッセージをいただき、食事を共にし、2025年万博誘致プレゼンターの小川理子トリオのジャズライブを楽しみます。共に祝っていただければと思います。いつも同窓会を憶えて下さることは大きな感謝です。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

2018年度プール学院ミヅパ会（短期大学・大学同窓会）総会報告



プール学院ミヅパ会会長
五十嵐 よし子（高84回・短英26期・佐藤）

母校プール学院短期大学の2020年度、学生募集停止が決定しました。プール学院ミヅパ会としては、存続を望んでいましたが淋しい結果になりました。

今年度のミヅパ会総会（2018年10月27日開催）において、杉山理事長より、プール学院の歴史、社会背景、キリスト教精神を含み、経緯を説明していただきました。総会出席者からは、プール学院への想いと共に厳しい意見も出ました。

プール学院ミヅパ会としては、今後の運営等についてさまざまな課題を抱えておりますが、プール学院卒業生、同窓会組織である「ミヅパ会」は繋がって参りますので引き続き皆様のご理解ご協力を賜りますよう、心からお願い申しあげます。最後に聖歌と旧校歌を歌って総会を閉じました。





2018年度 クラス代表者会 開催報告



常任学年代表委員会委員長
桑平 麻由子（高86回・桑村）

2018年10月20日（土）13時より学院ラウンジにおいて2018年度クラス代表者会が開催されました。（出席者68名）

第一部では杉山修一プール学院理事長・学院長より「プール学院のいま」を、鈴木光子一般社団法人POOLE理事長から「学院創立140周年記念事業」についてお話を頂きました。各委員会からの報告ののち、第二部の関東支部役員の坂口弥生さん(高105回・井本)とのミニトークでは、スライドを使いながら、支部の活動・母校への思いなどについて伺いました。



第5回 賀寿祝福礼拝 開催報告

広報委員会

2018年9月4日、台風21号が近畿地方を直撃し多くの被害をもたらし、復興活動やその後の天気の心配もありましたが、9月8日（土）勝山キャンパス・清心館において「第5回賀寿祝福礼拝」が無事、執り行われました。



還暦（60歳）44名、古稀（70歳）55名、喜寿（77歳）15名、傘寿（80歳）以上18名、計132名の皆様がご参加くださり、杉山修一プール学院理事長・学院長、成岡宏晃中高チャプレンよりお一人おひとりに祝福をいただきました。



特に最高齢99歳の大先輩のお元気なお姿にも感動し、学院の素晴らしい絆が感じられた礼拝でした。

同窓会開催報告 ～プチ同窓会withバギー～

会館事務室

11月10日(土)高校112回生7名と、その子供たちが同窓会館をご利用下さいました。ずらりと並んだバギー、1階和室で親子ゆったりお食事と歓談。2階からの”同窓会コーラスPOOLE”の綺麗な歌声と、キャッキャッとはしゃぐ子供たちの可愛い声に会館中が癒やされました。



大先輩から若い卒業生とその子供たち。幅広い年齢層の卒業生が集い、繋がっていく同窓会館のご利用をお待ちしております。

特集



オクスラドと永生学校の生徒たち（1879年頃）



プール監督記念女学校中庭

「140周年を迎える」 ―草創期のプール学院の教育と生活―

2018年11月3日 外国人居留地研究会全国大会発表『川口居留地の女子教育―プール学院の場合』より

理事長・学院長　杉山 修一

はじめに

「居留地と女子教育」というテーマの下、今回の居留地研究会全国大会で川口居留地を代表して、プール学院という女子教育を担ってきた学校について報告させていただきます。30枚ほど写真を用意しましたが、居留地でのプール女学校の学校生活を写したものです。話と連動しない写真もありますが、ご参考までにご覧いただければと思います。

川口居留地に生まれたキリスト教学校

大阪における近代の教育は1872年（明治5）の太政官布告の教育法令「学制」に始まるわけですが、公立の初等教育は整備されていきますが中等教育は不十分で、キリスト教の学校が重要な役割を果たしていきました。（1859年安政年間長崎に来日したプロテスタント最初の宣教師の一人である）米国聖公会のCMウィリアムズは1869年大阪川口居留地に移り住み、雑居地である与力町に家を借りて英語塾を開きます。4年後の1873年（明治6）この英語塾は改組して28名の生徒で「聖テモテ学校」となります。この学校には6名の女生徒が学んでいました。ウィリアムズはこの年東京に移り、築地に塾を開きこれが立教学校となります。そして聖テモテ学校は1881年に英和学舎と改称、1887年には東京の立教学校と合併しています。（このころすでに東京ではいくつもの女子教育機関が誕生していることもあり、ウィリアムズは他教派に後れを取っていることに心を痛め、東京における聖公会の女子教育機関として立教女学校、現在の立教女学院を1877年に湯島に開校しています。）

一方、聖テモテ学校の女生徒は1875年米国聖公会伝道局から派遣された宣教師エレン・エディが自宅に引き取りエディの学校として教育を担当し、1879年に居留地6番のホテルを買収し移転1880年に照暗女学校となり、1895年（明治28）に名称変更し京都に移転、現在の平安女学院になります。

米国聖公会とは別に英国聖公会の宣教団体CMSの影響下、男子の学校桃山学院、また女子の学校プール学院がそれぞれ居留地から始まっています。そのほかに1884年にはカンバーランド長老教会によって設立され、後に長老派の浪華女学校と合併する現在の大阪女学院となるウィルミナ女学校、またカトリックの幼きイエズス修道会の孤児への救済事業センタンファンスの活動の中から1884年に現在の信愛女学院となる信愛女学校が開校しています。このほかにも居留地外の雑居地に1878年沢山保羅が梅花女学校を開校しています。現存している女子教育を行う学校として、平安女学院、大阪女学院、信愛女学院、梅花女学院、プール学院の5校が川口居留地また周辺の雑居地から始まった女子教育機関と言えると思います。

永生学校の創設

さてプール学院に話しを戻します。この学校は英国国教会を源とする聖公会に連なる学校です。プール学院の源流には1877年の川口居留地4番に宣教師オクスラドが始めた私塾、英語女学校があります。しかしこれはうまくいかず、1879年6月、永生学校として生徒14名で正式に開校した時を創立の時としています。当初は少年もいたようですが、後に永生女学校となり、女子のみの教育機関として発展します。創立者M・J・オクスラドは東洋女子教育協会（FES）から派遣された宣教師で、香港で女子教育に携わっていましたが、英国聖公会伝道協会（CMS）宣教師C・F・ワレンの子どもたちの教育のために来日します。オクスラドの所属していた東洋女子教育協会（FES）はエイビールという女性が中国伝道の経験から中国人女性への伝道と教育の必要を感じて1834年に英国で設立した女性宣教師の団体です。やがて中国だけでなく、インド、パレスチナ、シリア、レバノン、そして日本にもその活動は及びます。オクスラドの後を継いだ2代目の校長ミス・ボールトンもFESの宣教師でした。もともとCMSとは



オクスラドが居留地4番に始めた永生学校（1879年）

かかわりが深かったFESは後年CMSを始めとする宣教団体に吸収されることになります。オクスラドは「永生学校」を設立後4年の1884年に香港経由で帰国します。CMSの記録では1888年帰国となっているので、日本を離れ、また香港で4年ほど過ごしたのかと思われます。彼女は1896年に今度はCMSの宣教師として再来日し北海道函館で伝道しています。

プール学院を発展させた
K・トリストラム校長





Arthur W. Poole 主教夫妻

プール監督記念女学校

永生学校開始後1883年に日本における最初の英国人監督としてA・W・プール博士が来日。永生女学校を支援するためFESやCMSに働きかけますが、前任地インドで罹患した風土病が悪化し、ほどなく帰国、故郷シュルーズベリーで亡くなります。プール監督の遺志をうけ英国、日本で募金が行われ、その基金をもとに1888年居留地12番の土地を購入、1990年には赤レンガの校舎が完成。この時から校名はプール監督を記念して、「プール監督記念女学校」となります。一般には「プール女学校」と呼ばれていたようです。相前後して今度はCMSの宣教師K・トリストラムが校長として着任。1928年まで長きにわたりキリスト教信仰に基づく女子教育を行うことになります。

トリストラムは当時の女性としては珍しくロンドン大学学士の資格をもち、英国の大学での数学教師として働いた後、宣教師として来日、徹底した英語教育とキリスト教教育を実践します。理系の教師であったことから理科教育にも力を入れたことが写真などの記録からもわかります。彼女のCMSへのレポートには受洗した生徒の数、伝道師になった卒業生、通訳として働く卒業生のことなどがしばしば書かれています。社会的な事にも関心を持ち、濃尾大地震の時には早速救援に出かけ、親を失った孤女を数人大阪に連れて帰り、プール女学校で学ばせています。「伝道と愛の奉仕」が彼女の教育理念であったのです。

プール女学校の生徒たち

プール女学校にはさまざまな階層の女子が入学していたことがわかります。特に寄宿生は大阪のみならず北海道から九州、また朝鮮、中国、台湾など今でいう帰国子女もいたようです。バチェラーの片腕となってアイヌ伝道に尽くした牧師の娘、アイヌ人伝道師の妹、各地の伝道に携わっていた牧師の娘等が入学していたことが記録に残されています。

特に1879年、長崎の東山手3番のグラバーの所有していた土地にCMS宣教師モンドレルによって招かれた宣教師グッドールの始めた女子塾、いわゆる十人女学校、後に長崎女学校になるのですが、この学校が1906年（明治39）には川口居留地のプール女学校に吸収合併されたことから長崎からの女学生もいました。当時の女学生には裕福な商人の娘だけでなく奨学金を受けて学ぶ貧しい家庭の娘、また濃尾大地震で親を失った孤女など多様な女子が入学しているわけです。1900年代になると入学者の3分の1が信徒の子女であったと記録にはあります。英語や音楽を学びたいという生徒もかなりいたようです。生徒と教師、とりわけ婦人宣教師との関係は親密で、新入生を迎える暖かい雰囲気に入学生が驚いたという記録、またしもやけの子どもには薬を塗りこむ、病気の寄宿生には寝ずの看病をしてくれたといった卒業生の証言が残っています。

居留地の廃止と私立学校令

礼拝、授業の厳しさとは別に和やかな雰囲気が学校にはあり、クリスマスには英国から取り寄せた人形などがプレゼントされるなど居留地のミッションスクールならではの生活でもあったようです。
川口居留地時代の大きな出来事としては1899年（明治32）に居留地が廃止され、それまで治外法権下にあったプール女学校はこの年公布された「私立学校令」によって大阪府知事の認可を受けなければならなくなったことがあります。更にいわゆる訓令12号「教育と宗教に関する文部省令」によって学校内での宗教教育や礼拝を行うことが認められなくなります。このような中、トリストラム校長は「設立許可願い」を提出し同時に学校での礼拝、聖書の授業が続けられるよう行政との度重なる粘り強い交渉に臨みました。その結果プール女学校の設立認可が下り、本科の卒業生は高等女学校卒業同等とみなされ、上級学校への進学と学校での礼拝、聖書の授業も従来通り行うことができるようになりました。

写真に残る質の高い女子教育

ご覧いただいている多くの写真は明治40年ごろのもので、英語でのキャプションが付けられていることから絵葉書のような形で英国などにも送られたものと考えられます。いききとした女学生の表情、また日々の生活をみることができます。女性が初等教育以上の教育を受けることがまだ困難な時代に、学ぶことの喜び、海外から使命をもってやってきた女性宣教師をロールモデルとして世界に目を向け、キリスト教の価値観をに基づき使命をもって生きることの大切さを自覚していった様子がこれらの写真からもわかります。

その後プール女学校は1917年（大正6）、大阪で最も交通量の多くなった川口を離れ、当時は農学校、高等商業、歯科医専等に囲まれるような静かな環境であった鶴橋村天王寺（現勝山）に移転し、今日を迎えています。雑駁な報告発表ですが以上で川口居留地からの発表を終らせていただきます。



礼拝堂で行われた聖書の授業

1 プール学院大学の桃山学院への継承について(3/3)〜プール学院と桃山学院〜

学院報86号(2018年2・3月発行)に引き続き、現況につきまして、ご報告させていただきます。

2018年4月、新しいスタート

2018年4月3日(火)の午前10時から、エレノアホールで桃山学院教育大学の入学式が挙行されました。なお午後には、プール学院短期大学の入学式が行われました。

南海バスの停留所の名称や車内のアナウンスは、3月31日までの、「プール学院前」から、「桃教大・プール短大前」に変更となりました。また、10月27日・28日には、プール学院短期大学と桃山学院教育大学の合同での大学祭が開催されました。

桃山学院との協議

前号でもお知らせいたしておりました双方理事長による協議会(毎月2回)は、昨年度末で終了いたしました。今年度4月からは連絡協議会として、双方の理事長を中心として行っております。

卒業証明書等について

プール学院大学の卒業生の皆様の証明書等の発行は、桃山学院教育大学で行われます。

以下の文面は、桃山学院教育大学のホームページに掲載文です。なお、お電話でご請求の場合は、072-288-6655(桃山学院教育大学:教務課)です。

プール学院大学に在籍しておられたみなさんへ
〜証明書発行につきまして〜

プール学院大学は2018年4月、設置者変更により学校法人桃山学院が運営する桃山学院教育大学になりました。プール学院大学の卒業生、退学者等に対する各種証明書の発行業務は、2018年4月以降は桃山学院教育大学の事務局で担当いたします。

2 プール学院短期大学について(1)

前号(学院報87号:2018年8月発行)に掲載いたしました、2020年度学生募集停止につきまして、その後の状況をご報告させていただきます。

状況説明について

卒業生対象の第2回説明会は、9月29日(土)清心館(勝山キャンパス)で行いました。第3回目として、10月27日(土)泉ヶ丘キャンパスで行いました。

なお、学生・保護者、教職員、関係諸団体(高等学校・就職先の企業・幼稚園等)と関係官庁等への説明等も行いました。

問い合わせ・証明書について

問い合わせ及び証明書については、在学生が卒業するまでの間は現状とおりです。それ以降は、法人本部(大阪市生野区勝山北1-19-31、電話06-6741-7005)で行います。

2019年度入学式の予定

4月2日(火)に泉ヶ丘キャンパスエレノアホールで行います。

3 創立140周年について

6月1日(土)午前中、中学・高等学校生徒の記念礼拝を行います。短期大学では、その前後日程のチャペルタイム、アッセンブリーで記念礼拝を行う予定です。その他につきましては、決まり次第、ホームページ等でご連絡をします。

勝山から京都へ

中学校・高等学校の理科室に保管していた、島津製作所製の教育用理化学機器4点「羅針盤」「箔検電器」「パスカルの原理実験器」「眼球模型」を、"非常に歴史的価値がある"とのことで、島津製作所　創業記念資料館(京都市中京区木屋町二条南)に寄贈しました。今後は創業記念資料館にて大切に展示保存していただけるとのことです。





2018年11月28日
受渡ししました

学院人事

学校法人役員・評議員

〈就　任〉−2018.10.1付−
理事・評議員　　吉田 幸一

教職員

〈退　職〉−2018.9.30付−
*短期大学
准教授(特別任用)　　臼井 正幸
職　員(常勤管理職嘱託)　荒芝 啓太

〈退　職〉−2018.12.31付−
職員(任期制専任)　佐々木 優

編集後記

10年前(2009年)の創立130周年は、アメリカ大統領にオバマさんが就任、日本では民主党の鳩山さんが総理大臣、1ドルは86円の最安値。今のトランプ旋風、安倍長期政権、1ドル110円位とは誰が想像していたでしょうか。

150周年の2029年が平和の中、建学の精神を大切にした、プール学院の歩みが守られますように。「桜」

19.2.28,700